

Takeatsu Kimura (Editor-in-Chief), Paul P. H. But, Ji-Xian Guo, Chung Ki Sung,  
Byung Hoon Han 編集

## International Collation of Traditional and Folk Medicine NORTHEAST ASIA Part I

本書は UNESCO が企画して運営委員長に Byung Hoon Han 教授 (国立 Seoul 大学天然物科学研究所) がなられて出版された表題の如く「伝統薬、民間薬の国際的照合」という書物である。今回発行された北東アジアの部は中国、香港、日本および韓国の伝統薬、民間薬の基源である植物、動物、鉱物の 800 種について分類学的に種類を分けて一種ごとに番号をつけ、その学名、ローカル名、薬用部分、生薬名、加工法、投与方法、民間療法、化学および薬理学の研究結果とその文献等を英語で列記して照合出来るように編集したデータ集である。

執筆編集には木村孟淳教授 (第一薬科大学)、Paul P. H. But 教授 (香港中文大学中薬研究センター主任)、Chung Ki Sung 教授 (国立全南大学大学校、薬学大学)、および Ji-Xian Guo 教授 (上海医科大学薬学院) の 4 先生が担当され、この Part I の編集主任は木村教授である。Part II, III, IV は But 教授、Sung 教授、Guo 教授がそれぞれ主任となられて各 Part を 200 ずつの生薬基源の植物、動物、鉱物について執筆される。Part I~III は植物のみであると聞いている。

この書物の出版の目的を Han 教授は次の様に述べておられる。要約すると「中国、香港、日本および韓国はほぼ同気温地域に位置しており、植物フローラは似ているので、この地域の伝統薬、民間薬も類似している。しかし、その知識は異なった国での長い歴史の中で独自に発達して来たので、似たものと、異なったものが雑っている。従って各国の伝統薬、民間薬についての知識を集めて比較、照合出来ればそこから真に効力のある医療資源を見出すことが可能ではないだろうか。この書物は植物化学者が新薬の開発にあたり、伝統薬、民間薬から興味ある生理活性があり、将来の研究の発展につながる材料 (生薬類) を見つけるのに役立てようと企画して作られたものである」と。

内容を簡単に説明すると、まず植物の番号と植物の学名 (ラテン名) が科名と共に示されている。科名は Engler の植物分類システムに従って配列され、科中の植物はアルファベット順に配列されている。学名の下には各国のローカル名がその国の略字、

(C=中国、H=香港、J=日本、K=韓国) と共に記してある。なお同属植物などで同様に利用されている植物が Related Plants: として付記されている。

次に生薬にする薬用部分 (Root, Seed, Leaf, Rhizoma など) が示されている。その後に (CP, JP, KP) とある場合の CP. は中華人民共和国薬典 (1990 年版)、JP. は 12 改正日本薬局方、KP. は大韓民国薬典 (6 版) のことで、この生薬が上記の公定書に記載されていることを示している。

次の Local Drug Name: ではこの生薬の各国での呼び名を示し、( ) 内に国の略名が付されている。次の Processing: にはこの生薬の基源植物から生薬を作る加工法 (修治法) が記されている。単に Air dry (風乾)、Dry under the sun (陽乾)、Dry in the shade (日陰乾燥) と記されたものが多いが、*Ephedra sinica* (シナマオウ) の項の Ma-0 (麻黄) を見ると、日本では陽乾のみであるが、中国では木質茎と根を除いてから切断して生薬にするとあり、また *Aconitum carmichaeli* (カラトリカブト) の項の Bushi、Uzu (附子、烏頭) では 1) 陽乾だけの中国の Caowutou (川烏) と日本の So-uzu (草烏頭)、2) 香港と中国での修治法、3) 韓国で行っている日本という加工附子の作製法、の 3 種類の加工方法が記述されている。この様に各国での生薬の修治法が簡単ではあるが記載があり、これは生薬研究者、生薬生産者や生薬製剤製造者に役立つ貴重な参考資料となる。次に Method of Administration: があって生薬の投与方法が述べられている。Oral (経口)、Topical (外用)、Gargle (含嗽)、Bathing (浴剤) などとして記し、その後の ( ) 内に decoction (煎剤)、water extract (水浸剤) や powder (粉末) などの剤形と使用国の略名が書かれている。

次にこの書物の一番重要な記載事項と思われる Folk Medicinal Uses: が記述されている。病名または病的症状が箇条書きに列記され、その後の ( ) 内に使用国の略名が書かれている。( ) 内に国名の多いことはその病気の治療にこの生薬を利用する国が多く、治療効果に対する客観性が高いことを示しており、また利用国の少ないものは再検討の必要

性を表しているのかも知れない。このことは比較照合の重要性が理解できるし、この記述は研究対象の植物や生薬の選択を教示してくれるものと考えられ、この書物の出版を高く評価出来る。

この項の後に生薬によっては Contra-indication (禁忌) や Side Effect (副作用) を記したものがあ。例えば *Ginkgo biloba* (イチョウ) の項の生薬 Haku-ka (白果) には投与禁忌と副作用が、その作用機序を含めて詳述してある。なお、薬用部分が複数ある場合は別々に薬用部分、Local Drug Name、Processing、Method of Administration および Folk Medicinal Uses が記されている。

次に Scientific Researches:がある。ここには 1993 年までの化学および薬理研究の成果を列記してあるが、化学の部は化合物群別に、薬理学の部は抽出エキス (水、エーテル、エタノール、70%メタノールなど) や含有化合物に対する薬理作用別に、次に記述されている Literatures の番号と共に記載されている。

Literature:には著者名、雑誌名、発行年、巻、頁が書かれているが、雑誌名はイタリックに、発行年を太字で表わして見やすい。

本書の巻末には PLANT NAME INDEX (in plant No.) (ラテン語の学名からの索引) の外に中文索引 (繁体字、簡体字、日字) (in plant No.) がある。これは漢字の画数による索引で、当帰を 6 画で見ると 當歸 (当归、当帰) 110, 114 と書かれている。110, 114 は植物番号であり、原文を引くことが出来る。勿論 1 3 画でも出てくる。日頃使っている植物名、生薬名で原文が引けるのは有難い。また、MEDICAL USE INDEX (in plant No.) がある。これには病名や病的症状がアルファベット順に書かれ、その治療に関連を持つ生薬類を植物番号で示してある。これは医薬品開発研究の取っ掛りにも利用できる便利で役立つインデックスであると思われる。

本書は良い企画の下、執筆者の並々ならぬご努力によって始めて出来たと思われる貴重な書物で、植物化学研究者が伝統薬、民間薬から医薬品を開発するのに役立つ書であることは勿論であるが、生薬研究者、生薬生産者や生薬製剤製造者など生薬に携わる人達にとって仕事の前進を思考させる糧になる必携の書物で、常に手元に置いて参考にしたいためである。昨今、イチョウ葉やノコギリヤシなどの抽出エキス剤が新薬として登場してきており、今後は伝統薬、民間薬からの医薬品開発が重要度を増すと考えられ、本書は誠に時宜に適した書物である。

この Part I に記載された伝統薬、民間薬は比較的一般的なものであるが、Part II 以後のものはより地域性が高く、私たちに十分な知識の無い生薬も多くなることであろう。一日も早く続刊されることが望ましい。また、この書物は北東アジア地域のみのものであり、続いて東南アジアのものも企画されていると聞いている。是非 UNESCO ではこれを全世界にまで広げて頂きたいものである。

この書評を書き終えた日に、執筆されておられる木村教授から Part II が届けられた。Part II は Part I と同様 200 種の植物 (番号 201~400) が記載されており、内容はほぼ同様であるが、活字が大きくなり、鮮明でより見やすくなっている。また、化学および薬理学の文献は 1996 年までのものになっている。その他、巻末に INDEX TO LOCAL HERB NAMES が追加されていて記載植物及び生薬名の各国での呼び名が英語で植物番号と共に記述されていて、より本文を検索するのに便利となっている。

(滝戸道夫)

出版社

World Scientific Publishing Co. Pte.Ltd.

PO Box 128, Farrer Road, Singapore 912805

Vol I (Part I) US 48\$